

# 内藤光次 Koji Naito

新説 All-Nations 初代日本人選手は慶応ボーイ



1913 GOLDSMITH'S ALL-NATIONS BASEBALL CLUB POST CARD

From left to right : Art Dunbar, Frank Blattner, John Donaldson, McBride, George Walla, Castanier, Jose Mendez (HOF), Pedros, Cabinas, Chief Seymour & Naito

「オール・ネイションズ (All-Nations 1912-1925)」は、1912 (明治 45) 年に様々な国籍の優秀な選手を集めて結成された「プロ」の独立巡業球団です。

野球界だけでなくアメリカ社会全体が人種隔離に厳しい時代にあって、あらゆる面で人種の壁を打ち破った画期的なクラブチームでした。

この球団は、差別や偏見のない「人間のあるべき理想」の姿をはじめて実現していた110年以上も昔の「プロ」野球チームだったので。

今回は、そのような「オール・ネイションズ」で初代の日本人選手として活躍した内藤光次選手 (慶応義塾出身) について調べてみました。

冒頭の図版は、1913(大正02)年につくられた「オール・ネイションズ」のポストカードです。新聞記者などへの取材許可証も兼ねていました。

先頭の一番小柄な選手は、日本人の「**ナイトウ**」選手です。

その他は、向かって左から アート・ダンバー、フランク・ブラットナー、ジョン・ドナルドソン、マクブライド、ジョージ・ワラ、カスタニエ、ホセ・メンデス、ペドロ、キャビナス、チーフ・シーモアの10人です。

実は、「オール・ネイションズ」に「**K.Naito**」という日本人選手がいたことは、早くから知られていました。

けれども、「その人が誰なのか?」「どんな人だったのか?」あまり情報がなく、長年にわたり日米の野球史研究者たちにも謎でした。

そのため、日本では1914(大正03)年から「オール・ネイションズ」でプレーした三神吾朗が最初の「プロ」野球選手とされてきました。

そこで、昔のアメリカで発行されていた日本語新聞を調べていたところ、**内藤光次**こそが「オール・ネイションズ」の初代日本人選手だと確信させる記事を見つけました。

シカゴの同胞野球家**内藤光次**君は今春もセミプロ組に加入して各地を旅行するそうだ

これは、ニューヨークシンボウ「紐育新報」紙の1913(大正02)年4月19日付「●野球消息」という記事の一節です。この記事の内容からは、

「シカゴ在住の日本人野球選手 **内藤光次**君が(昨年に続き)今年の春も(「オール・ネイションズ」と思われる)セミプロチームに加入して様々なところで試合をするために旅行をする」ことがわかります。

当時のアメリカ野球界では、様々な制約から日本人選手が加入できる「セミプロチーム」は、事実上「オール・ネイションズ」だけでした。

また、「内藤光次」の読み方は、アメリカにのこる「旅行者リスト」の表記から「Naito Koji」と確認できました。

つまり、「K.Naito」が「内藤光次」であるということは、これらの資料が書かれた時期や内容から疑う余地がないでしょう。

それでは、「内藤光次」という人は、どのような人だったのでしょうか。

内藤光次は、1886(明治19)年1月16日に、兵庫県神崎郡川辺村(今の兵庫県神崎郡市川町)で父・卯三郎の長男として生まれました。

1897(明治30)年4月、慶応義塾幼稚舎(小学校)に入り

1899(明治32)年4月、13歳で慶応義塾幼稚舎を卒業

同級生には三神八四郎(三神吾朗の兄)など

1899(明治32)年4月、慶応義塾普通部2年に進学(成績優秀のため)

普通部では野球部・庭球部で活動

1903(明治36)年4月、慶応義塾普通部を卒業

同級生に桜井弥一郎(野球殿堂特別表彰)など

1904(明治37)年8月、18歳で慶応義塾予科からアメリカに留学

※留学先の都市や学校名など今のところ不明

1912(明治45)年、26歳のとき「オール・ネイションズ」に入団

1913(大正02)年、27歳のとき「オール・ネイションズ」を退団

※アメリカからの帰国年月は今のところ不明

1929(昭和04)年6月、クロードネオン電気会社を4名で創業して

取締役就任

以後、グループ各社の社長などを歴任

## 「内藤光次」の慶応義塾でのスポーツ活動

『慶応義塾野球部史』によると、

1902(明治35)年3月、普通部5年生のときにおこなわれた普通部の選手による紅白試合に3番打者・遊撃手として出場しています。

1904(明治37)年3月の「第二選手(準レギュラー)試合」には、遊撃手として出場、直木松太郎(中堅手)などとともに勝利チームの一員でした。

また、「慶応義塾学報」には、

1902(明治35)年6月におこなわれた慶応義塾普通部選手チームと四校連合(麻布中・正則中・立教中・青山学院)チームの試合にも3番打者・遊撃手として出場していた記録などものこっています。

さらに、テニス部では、1901(明治34)年の普通部4年生のときから1904(明治37)年にアメリカへ留学するまで4年にわたり活躍しました。

ある本には、「勃興時代の庭球部には内藤光次、武蔵野儀助などと云う男が、朝から晩までラケットを握って飛び廻っていた」とあります。

また、小泉信三(元慶応義塾塾長)によると、

「(テニス)技術の上で私が特に指導をうけたのは内藤光次君であった。内藤君は野球のシヨウトで鳴らした人であったが、途中からテニスに転じて来た。啻に技術のみならず人となり機智縦横という趣があり、どんな困難に出会ってもどしどし活路を切り開いて行く人のように見えた。」とあります。

慶応義塾時代の「内藤光次」選手が野球に専念し、アメリカに留学していなければ、日本でも有望な野球選手となっていたことでしょう。

## 「内藤光次」のアメリカでのスポーツ活動

内藤光次が「オール・ネイションズ」に入団した経緯は、よくわかっていません。ただ、ある新聞の1912(明治45)年4月20日付には「オール・ネイション野球クラブが、インド人・中国人・日本人・黒人の4人の優秀な選手を求めている」という内容の記事が掲載されています。

内藤は、このような記事から「オール・ネイションズ」が日本人選手を求めていることを知り、自ら応募したのではないのでしょうか。

また、別の新聞の1912(明治45)年5月3日付には、5月5日に開催予定の「オール・ネイションズ」の試合予告記事のなかで、すでに「レフト 日本人 **K.Naito**」と紹介されています。

これらのことから、内藤光次が「オール・ネイションズ」に入団した時期は、1912(明治45)年4月下旬の頃と推測できます。

ところで、内藤光次は、アメリカでも野球のほかにテニスも続けていました。

1913(大正03)年4月26日付の「ニューヨークシンボウ紐育新報」紙には、当時シカゴにいた日本人テニス選手の番付(ランキング)の記事があり、「東の大関(最高位)三神八四郎 西の大関(第2位)内藤光次」とあります。

この記事からは、内藤と三神八四郎(小学校の同級生)との再会と交流をつうじ、内藤と三神吾朗(八四郎の弟)との関係も浮かびあがってきます。

三神吾朗は、1914(大正04)年に内藤光次 と入れ代わるように「オール・ネイションズ」の選手となりました。

内藤光次にとって、三神吾朗は最高の後継者だったに違いありません。

## 帰国後の「内藤光次」

内藤光次は、1920年代の初めに日本へ帰って、しばらく木材輸入の仕事をしていました。

その後、1929(昭和04)年には、クロードネオン電気株式会社(今の大阪クロードなどの前身)を3名の友人と協力し大阪や東京で創業します。

この会社は、日本の本格的な屋外広告製作のさきがけとなった会社です。フランス人のジョルジュ・クロードが発明したネオン放電管の万国特許を譲り受け、アメリカ人技師から製造技術を習得したそうです。

内藤光次は、大阪支店長をはじめ、各地のグループ会社で取締役や社長などを歴任し、業界の発展にも貢献しています。

現在の大阪クロード社は、甲子園球場や京セラドームの大型ビジョン、通天閣のネオン広告なども手掛けている会社です。



内藤光次は、「世界への扉」を堂々と開いた人でした。彼の知られざる一歩が、今に続く日本野球の新たな歴史そのものだったのです。

## ◎主な参考文献

『三田生活：私学の天下』 東奥逸人 著 1915.04.18

『大衆人事録 第3版』 帝国秘密探偵社 編 1930.07.22

『慶応庭球三十年』 慶応義塾体育会庭球部 編 1931.11.22

『慶応義塾野球部史』 慶応義塾体育会野球部史編纂委員会 編 1960.02.20

『日本のネオン』 日本のネオン編纂委員会 編 1977.05.10

『慶応義塾入社帳 第4巻・第5巻』 福沢研究センター 編 1986.07 / 1986.09

「慶応義塾学報」 慶応義塾学報発行所 1898-1914 (検索語:内藤光次・内藤光治)

「“ジャップ・ミッド”を巡る謎とロマン「オール・ネイションズ」にいた2人の日本人 / 文・佐山和夫」

「ベースボールマガジン」 Vol.36 No.03 2012.03.19

「●野球消息」 (シカゴの同胞野球家 内藤光次君は今春もセミプロ組に加入して各地を旅行するそうだ)

「紐育新報」紙(「Nyū Yōku Shinpō」紙) 1913年04月19日付 06頁

「投込」 (東 大関 三神八四郎 西 大関 内藤光次)

「紐育新報」紙(「Nyū Yōku Shinpō」紙) 1913年04月26日付 06頁

「The Newport miner」紙 1912(明治45)年4月20日付 03頁 (All Nation Ball Club.)

「DuPage County Register」紙 1912(明治45)年5月03日付 08頁 (L.F. Japanese K. Naito)

「LIST OF PASSENGERS」 (Koji Naito Migration・Washington, Seattle, Passenger Lists, 1890-1957)

<https://www.familysearch.org/ark:/61903/3:1:3Q9M-CS1K-2X9?cc=1916081&personaUrl=%2Fark%3A%2F61903%2F1%3A1%3AZKH6-XWN2>

「一度定説化してしまうと、それをくつがえし、或は是正することが如何に至難であるかは一度でも経験したほどのものなら領けると思う」—齋藤三郎著『啄木文學散歩』165頁より

今回は内藤光次(「All-Nations」初代日本人選手)について  
少し調べてみました

みなさまのご意見 ご感想 新たな情報などもお待ちしております  
最後までお読みいただき誠にありがとうございました

2023(令和05)年02月02日

著者：弘田正典(野球史研究)

発行：スポーツ文献社

# Koji Naito 内藤光次

New Theory : The first Japanese player of the All-Nations was a Keio boy



1913 GOLDSMITH'S ALL-NATIONS BASEBALL CLUB POST CARD

From left to right : Art Dunbar, Frank Blattner, John Donaldson, McBride, George Walla, Castanier, Jose Mendez (HOF), Pedros, Cabinas, Chief Seymour & Naito

The All-Nations (1912-1925) was an independent "professional" barnstorming baseball team formed in 1912 by a group of talented players from various nationalities.

At a time when not only baseball, but American society as a whole, was strictly against racial segregation, this was a groundbreaking club team that broke down racial barriers in every aspect of the game.

This team was a "professional" baseball team more than 110 years ago, the first to realize the "Ideal of what a human being should be" without discrimination and prejudice.

In this issue, we looked into **Koji Naito** (from Keio Futsubu), the first Japanese player to play in such an "All-Nations".



The illustration at the beginning of this page is a postcard of "All-Nations" made in 1913. It also served as a permission slip for newspaper reporters.

The smallest player at the front is a Japanese player named "**Naito**". Others are, from left to right, Art Dunbar, Frank Blattner, John Donaldson, McBride, George Walla, Castanier, **Jose Mendez** (HOF), Pedros, Cabinas, Chief Seymour.

In fact, it was known early on that there was a Japanese player named "**K.Naito**" in "All-Nations".

But, "Who was he? What was he like? For many years, this was a mystery even to baseball historians in Japan and the United States.

For this reason, Goro Mikami, who played for the "All-Nationals" from 1914, has been considered the first "professional" baseball player in Japan.

So, while researching Japanese-language newspapers published in the United States in the past, I found an article that convinced me that **Koji Naito** was the first Japanese player on the "All-Nations" team.

Fellow Chicago baseball player **Koji Naito** will join the semi-pro team again this spring. and will be traveling around the country.

This is a section of an article titled "● Baseball News," dated April 19, 1913, from the New York Simpo (紐育新報). From the content of this article, it appears

"Koji Naito, a Japanese baseball player living in Chicago, has joined a semi-professional team (supposedly "All-Nations") again this spring and travel to various places to play games."

In the American baseball world at that time, due to various restrictions, the only "semi-professional team" that Japanese players could join was virtually the "All-Nationals".

The reading of "内藤光次" was confirmed as "Naito Koji" by a "traveler's list" still in the United States.

In other words, there can be no doubt that "K.Naito" is "Koji Naito" based on the timing and content of these documents.

So what kind of person was "Koji Naito" ?

**Koji Naito** was born on January 16, 1886 in Kawabe-mura, Kanzaki-gun, Hyogo Prefecture (today's Ichikawa-cho, Kanzaki-gun, Hyogo Prefecture), the eldest son of his father, Usaburo.

April 1897. Entered Keio Yochisha Elementary School

April 1899. Graduates from Keio Yochisha Elementary School at age 13.

Classmates include Hachishiro Mikami (Goro Mikami's older brother)

April 1899. Entered Keio Futsubu School 2nd year due to excellent grades (Keio Futsubu is a private senior high school)

Regularly active in the baseball and garden tennis clubs

April 1903. Graduated from Keio Futsubu School

Classmates include Yaichiro Sakurai (Baseball Hall of Fame Special Recognition)

August 1904. Studied in the U.S. from Keio University Preparatory School at the age of 18.

※City and school name of the study abroad destination are unknown at this time.

**In 1912. At the age of 26, he joined the "All-Nations"**

**In 1913. At the age of 27, left "All-Nations"**

※Date of return from the U.S. is unknown at this time.

June 1929. Founded Claude Neon Electric Company with four members and became a director. Since then, he has served as president of group companies.

## Sporting activities at Keio Futsubu School by "Koji Naito"

According to the "History of Keio University Baseball Club", In March 1902, when he was a fifth-year student at the Futsubu School, he participated in an intrasquad game played by Futsubu School players, batting order is third batter and playing shortstop.

In March 1904, he participated in the "Second Players (semi-regular) Game" as a batter and was a member of the winning team along with Matsutaro Naoki (center fielder) and others.

In addition, the "Keio Gijuku Gakuho" also includes the following There is also a record of his participation as the No. 3 hitter and a playing shortstop in a June 1902 game between the Keio Futsubu School Ordinary Division team and a team from the four schools (Azabu, Seisoku, Rikkyo, and Aoyama Gakuin Senior High School).

In addition, he was active in the tennis club for four years, from 1901, when he was a senior at the Keio University Preparatory School, until 1904, when he went to the United States to study tennis.

According to one book, "In the garden tennis clubs of the early days, men such as **Koji Naito** and Gisuke Musashino practiced from morning till night with their rackets in their hands.

Also, according to Shinzo Koizumi (former president of Keio University) "In terms of tennis skills, I was particularly guided by **Koji Naito**, **Naito** was a baseball shortstop who switched to tennis. He was not only a man of skill, but also a man of character and wisdom, and he seemed to be a man who would always find a way out of any difficulty he encountered."

If "**Koji Naito**" had not devoted himself to baseball and studied in the United States during his time at Keio University Preparatory School, he would have been a promising baseball player in Japan.

## Sporting activities of Koji Naito in the U.S.

The circumstances of Koji Naito's joining "All-Nations" are not well known. However, one newspaper, dated April 20, 1912, states "The All-Nations Baseball Club is looking for four outstanding players: an Indian, a Chinese, a Japanese, and a Negro".

Naito must have learned from these articles that "All-Nations" was looking for Japanese players and applied himself.

In another newspaper, dated May 3, 1912 In an article announcing the "All-Nations" game scheduled to be held on May 5, the name " L.F. Japanese K. Naito" was already introduced.

By the way, Koji Naito continued to play tennis as well as baseball in the United States.

The New York Simpo, dated April 26, 1913, reported the ranking of Japanese tennis players in Chicago at the time.

The article states, "The top-ranked player in the east is Hachishiro Mikami, and the second-ranked player in the west is Koji Naito.

This article also reveals the relationship between Naito and Goro Mikami (Hachishiro's younger brother) through Naito's reunion and interaction with Hachishiro Mikami (a classmate from elementary school).

Goro Mikami became a member of the "All-Nations" team in 1914, replacing Koji Naito.

For Koji Naito, Goro Mikami must have been the best successor.

## Koji Naito after returning to Japan

**Koji Naito** returned to Japan in the early 1920s and worked as a lumber importer for a while.

Later, in 1929, he founded Claude Neon Electric Company (the predecessor of today's Osaka Claude and others) in Osaka and Tokyo in cooperation with three friends.

This company was the pioneer of full-scale outdoor advertising production in Japan. The company acquired a universal patent for the neon discharge tube invented by a Frenchman, Georges Claude, and learned manufacturing techniques from an American engineer.

**Koji Naito** has also contributed to the development of the industry by serving as the Osaka Branch Manager and as a director and president of group companies in various locations.

Today, Osaka Claude Company is also responsible for the large screens at Koshien Stadium and Kyocera Dome, as well as the neon advertisements at Tsutenkaku Tower.



**Koji Naito** was the one who proudly opened the "door to the world". His unknown step was the new history of Japanese baseball itself that continues to this day.

## ◎Main References

『三田生活：私学の天下』 東奥逸人 著 1915.04.18

『大衆人事録 第3版』 帝国秘密探偵社 編 1930.07.22

『慶応庭球三十年』 慶応義塾体育会庭球部 編 1931.11.22

『慶応義塾野球部史』 慶応義塾体育会野球部史編纂委員会 編 1960.02.20

『日本のネオン』 日本のネオン編纂委員会 編 1977.05.10

『慶応義塾入社帳 第4巻・第5巻』 福沢研究センター 編 1986.07 / 1986.09

「慶応義塾学報」 慶応義塾学報発行所 1898-1914 (search term:内藤光次・内藤光治)

「The Mystery and Romance of the "Jap Mikado": Two Japanese in "All-Nations" / Written by Kazuo Sayama.

「Baseball Magazine」 Vol.36 No.03 2012.03.19

「●野球消息」 (シカゴの同胞野球家 内藤光次君は今春もセミプロ組に加入して各地を旅行するそうだ)

「紐育新報」紙(「Nyū Yōku Shinpō」紙) April 19, 1913 paid 06 pages

「投込」(東 大関 三神八四郎 西 大関 内藤光次)

「紐育新報」紙(「Nyū Yōku Shinpō」紙) April 26, 1913 paid 06 pages

「The Newport miner」紙 Dated April 20, 1912, p. 03 (All Nation Ball Club.)

「DuPage County Register」紙 Dated May 03, 1912, p. 08 (L.F. Japanese K. Naito)

「LIST OF PASSENGERS」(Koji Naito Migration・Washington, Seattle, Passenger Lists, 1890-1957)

<https://www.familysearch.org/ark:/61903/3:1:3Q9M-CS1K-2X9?cc=1916081&personaUrl=%2Fark%3A%2F61903%2F1%3A1%3AZKH6-XWN2>.

“Once a theory is established, it is extremely difficult to overturn or correct it.

If you have experienced it even once, I think you would agree.”

—From Saburo Saito's "Takuboku Bungaku Walk" (A Walk Through Takuboku's Literature), p. 165

This time, I did a little research on **Koji Naito**  
(the first Japanese player of "All-Nations").

We welcome your comments, opinions, new information, etc.

Thank you very much for reading to the end.

February 02, 2023

Author: Masanori Hirota (Research on Baseball History)

Published by Sports Literature

Translated at [www.DeepL.com](http://www.DeepL.com) / Translator (free version).